
ゆびあそび

かずてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆびあそび

【Nコード】

N0153M

【作者名】

かずてる

【あらすじ】

紙の積み散らかった部屋。

世界から断ち切られた場所で、ある不倫が行われていた。

幼児退行する女。

死と生のあいだで失ったものへの欲望をむき出しに求め合うふたり。

1 昼

おゆびさんであそぶの。目を寄せて私はその遊びに夢中になる。

克也がうなじを撫でる温かみを感じていたが、やがてゆっくりとした寝息が耳のうしろのほうから聴こえてきた。

なかゆびさん、こんにちは。両手の指先をあわせるとお見合いごっこができる。両方の中指を折り曲げてお辞儀をさせると、おばあさんのようにふるふると震える。その様子がほんもの人間のようで可笑い。

冷房がひときわ出力を高めて、音を立てた。ベッド脇の屑入れから新鮮な精液の匂いが鼻をつく。

くすりゆびさん、こんにちは。指の腹に食い込んだ指輪。静脈がかすんだ鉛筆の線のように指の横を走る。右と左で模様がちがうんだ。こゆびさんはたしかにちっちゃくて、子供みたい。

克也の懷で、からだを小さく折り曲げてこどものふりをした。克也は私のからだを使って欲望を満たしてしまつて、今は車に撥ねられた犬の死骸のように眠っている。開いた口から前歯が見える。おでこを克也のみぞおちにくつつけて、彼のからだが生きているのを感じとろうと集中する。からだの内側から押し上げてくる肺の感触や、大きな心臓の音。

あ、生きてる。

そう思つて、飽きてしまったゆびあそびをやめた。わたしも、動かなくなる。死骸のふり。死んだふりをしても、命は続く。心臓の音がそう、教えてくれた。

夫にはとくにバレていたようだ。問い詰められて、なにもかもしゃべった。聞かれてもいないこともしゃべった。彼といるとどん

な気持ちになるのかを、しゃべった。もつと狂気じみたこともしやべった。

私は彼といると、生まれたての赤ちゃんのような気持ちになれるの。あなたは当然知らないだろうけど、私は死体や犯罪やたくさんの人が死んだりする事件に、ひどく興奮するの。そんな私は人間として壊れているのかもしれないけれど、彼は当たり前のように受け入れてくれる。彼に抱かれると、生まれたての赤ちゃんのようになるの。だから、不倫しています。

夫は吐きそうな表情で顔をしかめていたけれど、まっすぐ私を見ていた。私も、まっすぐ夫を見ていた。

紙だらけの、克也の部屋。たいていのものは綺麗に片付いている。ハンガーがけのシャツ、棚に並んだ食器。

紙、それだけが唯一自由に放つたらかしでそここの家具の上に積みあげられ、壁に貼られ、床に散らばっている。他人の書いた、あるいは彼の書いた文章が印字されている。画像もある。僧院、胎児、花、そういった雑多なイメージ。この部屋はまるで彼の脳の内側だ。

「のりこも、ねるね」小さく言って目をつむった。

2 朝

春先の朝、ひとりでジョギングをしていた。いい天気だけど肌寒くて、吐く息が白い。あれはまだ克也と知り合いたての頃だった。近所のごみ置き場の一角に目が留まった。素裸の小さい女の子向けのビニール人形。足が止まる。私は幼い頃そういう人形が好きだった。

人目を気にして躊躇したあと、拾い上げた。ぐっとその肌色のソフトビニールの胸を親指で押し潰す。胴体と、化粧して目をぱち

りさせた頭部とをつなぐ隙間からぷすーと空気が漏れていった。こ
うやって潰す感触が好きだ。

恐る恐る鼻を近づけてみる。人間の匂いがしたらいやだな、と思
って。

ビニールの匂いがした。

人形は、生きているような姿につくられたのに、生きることとも死
ぬこととも全然関係ない匂いがする。

ぱつ、と手を離すと人形は不燃ごみの指定袋の山のなかに落ちて
いった。

3 夕

「規子、おきろ」

克也の声で目が覚める。

「もう時間だぞ」

夕焼けで窓枠が光っている。

いやだ、と思った。

もう動かない。

克也がブラケットを剥ぎ取る。ふたりとも裸だ。

「ほら、起きるぞ」そう言って私の肩に腕をまわし抱き起こそうと
する。それに逆らって力んで背筋を反らすと、肩がベッドのスプリ
ングに沈み込む。呆れた克也は今度は私のからだの下に腕を入れ、
私を抱え上げようとする。

今度は体が浮き上がった。

「やめてよ」

体をうねって腕から離れた。私はうつぶせにベッドに落ちる。指
で克也の手をはらいのける。ベッド脇で棒立ちの克也が、私を見下
ろしている。

「帰らないとダメだろ」

「いいよ」

「殺されるぞ、旦那に」

「いい、つてば」

「ほら」尻をぴしゃりとたたかれる。私は自分の腕にすっぱり頭をうずめた。耳だけで克也の動きを追った。

克也の足音が遠のき、トイレの扉を開け閉めする音がし、小便の音がし、水洗の音がした。トイレットペーパーを繰る音がしたのはよくわからない。ペニスを拭いたのかもしれない。便器を拭ったのかもしれない。水洗の音とともに克也の足音は流しに向かう。

蛇口を捻る音、ガラスのかち合う音。冷蔵庫を開けるときの、扉の断熱パッキンがたてる音。冷房の『除湿』で浄化された空気。

からから氷がまわる音をさせながら、克也の足音が戻ってきた。冷えたグラスが私の尻に押し当てられる。私は、尻の筋肉を動かすこともせずただじっとしている。克也がグラスの液体を飲む音。だるさを振り払おうとして吐く息。

間があつて、足音が間続きの隣の部屋へ移っていった。

「いい加減にしない」

隣部屋から克也の声が飛んてくる。

顔を上げると、克也は車輪付きの事務椅子に腰掛けていた。克也は窓越しの、向かいのマンションに照り返す夕焼けを背にしていた。その股間は陰毛が肌より翳って見えるほかは暗くて見分けがつかない。

仕事机に置いたグラスの麦茶が夕焼けで真っ赤に見える。私は黙っている。ただ夕焼けが眩しくて細めた目で睨みつけているだけだ。克也のシルエットが立ち上がって近寄ってきた。また手が伸びてきて、私の腕を掴んでベッドから引き起こそうとする。「いやぁ」弱々しく言い、振りほどく。また手が伸びてきて掴もうとするのを、はたいてよける。

「親子」

父親のような口調で言い、今度はのしかかってきた。

後ろから抱きかかえてベッドから離そうとしてくる。克也の腕に爪を立てて逃れようとした。克也の腕がぐつと強張り、急に荒っなくなる。体がベッドから浮いた。両手でベッドマットの両端にしがみついて引き離されまいとあらがう。

克也は息を荒くし私の背中に顔をすりつけて、勢いと足の筋力で私をベッドから引き離した。

私はクヌギの幹から剥がされた虫のように手足を空中でばたつかせ、足が当たったサイドテーブルが乗っていた紙束と一緒に音をたてて倒れる。克也はひときわ私のからだを高く持ち上げ、胸まで上げるとプロレス技のように床に向かって私のからだを叩き付けた。

肩がフローリングの床に最初に触れ、顔と腰骨が同時だった。いろんな骨と肉がせめぎあう音がして、肺が圧せられげっぷのような短い悲鳴が出た。

叩きつけられた痛みよりも強く突き上げる、衝動。

手について胸に太腿を引き付け、跳ねるようにはねを使って立ち直りざま、克也の下腹にとがせた踵を蹴り入れた。うふつ、と下腹から押し出された空気をつば混じりに口から漏らし、腰を引いて二三步退く克也。

それでも顔をゆがませながらゾンビのように組み付いてくる。わあっと広げた両手で私に向かってくる。その右腕の付け根、筋肉がヒレのように肋骨から上腕骨へと張った辺りに歯をむき出して噛み付いた。口いっぱいに頬張った男の筋肉を噛み切ろうと顎を全力で下へと引いた。

「おつ」

短く呻いた克也は、喉輪で私の喉元を突き上げる。激しくむせる私の唾の糸を引きながら顎から離れていく肉。

喉を抑えながら腰を落とした私のこめかみめがけて、克也の渾身の張り手が振り下ろされた。ごんっ、という衝突音とともに頭が右に振れ、一瞬意識が飛び、床に胸から崩れ落ちる。

うつぶせに倒れた私の上に克也が飛びかかり、組み敷き、手を捻

り上げて痛くする。「ああ」と呻いて足をバタバタさせた。数秒でそれはゆるめられ、克也は私の背中に馬乗りになって後頭部を掴み床に頭を押し付ける。

私は目をむいて首を捻り、なおも克也の指に噛み付こうとしたが、がつちりと体重を掛けられた私の頭は床に擦れてごりごりいい、乳房は肋骨と床の間で見事に潰れていた。

私は犬のように低く唸り続け、鼻と喉から荒い息とねばついた鼻水や唾をこぼした。ときおり呻り声を上げながら逃れようと身をよじる。逃すまいと克也は私の顔を床に押し付け続ける。

動けない。床に押し付けられてぶさいくに潰れた顔。悔しさと諦めは二人三脚でやってきて、私に敗北感のたすきを渡していった。私を狂女たらしめていたアドレナリンが掃除機で吸い取られるように冷めていく。四十路を前にして床に組み敷かれた女。投げ落とされてぶった肩はアザこそないものの、緩んだ肌を何枚かめくれば年齢性のシミが鎮座しているに違いない。みじめさが女のプライドに沁みる。身も心もひどく痛む。

ばかばかしくて、泣けてきた。

低い嗚咽を漏らしながら、途切れない涙が頬を伝いフローリングの細い溝に流れ込み、埃を浮かべて水溜りをつくっていく。体液と混じった床用ワックスの臭さ。

嗚咽は私を疲れさせ、やがて勝手に止んだ。静かな涙だけが残った。克也が頭から手を離す。背中にもたがった克也の睾丸の温かみ。私のすすり泣く音だけが部屋を満たした。

いつもまにか夕焼けはマンションの常夜灯の青白い光にとって替わっていた。どれくらい女々しく泣いていたのか。泣き疲れて脳が痺れていた。

そうしているとふと、克也の睾丸の触感が私の背中から離れた。立ち上がった克也は暗がりと化していた部屋の明かりを点けた。それから窓を開けカーテンを引き、冷房を切った。

私は床に片頬をつけて気をつけの姿勢でつぶしたまま、死体の

ように横たわっていた。克也が水色のトランクスを履くのを目だけで追った。ふいに視界から消えて戻ってきた克也の手から、虚ろな視界に私の白い携帯が転がった。

「旦那に電話。うまく言い訳してよ」

「ごめん。彼んちに泊まるから」

うまくは言い訳できなかった。脳が空っぽでそのまま言葉になっ
てしまう。呪詛、罵声。夫がそれらに込めたはずの思いは、携帯の
受話器で綺麗にろ過されてほとんど私には届かない。

携帯の電源を切ると、私と世界をつなぐものは何もない。

4 夜

この部屋はまるで彼の脳の内側だ。積み散らかった無数の紙。月
夜の植物園みたい。

風でめくれたレースカーテンの隙間から、月明かりがベッドに横
たわる私たちの裸を照らす。発光性クラゲの青くて硬質な光。数時
間前の格闘のせいで体のあちこちが痛い。克也のせいだよと言った
ら、規子が聞かない子だからだと克也は言った。

世界から断ち切られた場所。ここで産まれた私。体を小さく小さ
く丸める。できるだけ小さく。そして、おでこを克也のみぞおちに
くつつける。人が生きている証しを確かめようと。大きな心臓の音
死の匂いがしない。祈るように両手を合わせる。指先同士をくつつ
けるとお見合いごっこができる。おやゆびさんと、ひとさしゆびさ
んはじょうずにごあいさつをする。

なかゆびさんはおじぎをすると、ふるふるとおばあさんのように
ふるえるから可笑的い。

5 おもちゃ売り場

克也と別れて半年ほど経った頃だったと思う。

私は娘を連れておもちゃ売り場に来ていた。けたたましい悲鳴が聴こえた。

地べたに手足をばたつかせて泣き叫ぶ小さな女の子がいる。おもちゃをねだっているようだ。お母さんらしき女性が手をすっぱ抜けそうなほどぐいぐい引っ張っているのに、女の子は必死でリノリウムの床に手のひらをつっぱって動こうとしない。

可愛い薄ピンクのフリルのついたワンピースがへその上までめくれ上がって、ぽってりとしたおなかがる見えになっていた。

娘が私に振り向いて目を丸くする。私も目で同意した。

「お行儀、わるいね」

女の子のわきを通る瞬間、娘が小さくそうつぶやいた。

耳をつんざくような声で泣き叫びながら、女の子は手足をばたつかせていた。

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0153m/>

ゆびあそび

2010年10月8日11時17分発行